

St. Luke's International University Repository

シンポジウム 実践重視の看護を問い直す /
研究の視点から:
研究視点からの実践の位置づけと自分史

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田代, 順子, Tashiro, Junko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00014766

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



実践重視の看護を問い直す／研究の視点から

— 研究視点からの実践の位置づけと自分史 —

田代 順子¹⁾

研究の視点から実践を位置づけるなら、看護現象にアプローチし、その成果である看護知識の蓄積を通して、看護実践（サービス）の質を保証し、向上させるためになされる活動といえます。この実践と研究との関係の理解は私自身の過去24年間の看護婦として、看護教師、さらに米国における博士課程での学びのなかで、時とともに深まってきました。

I. 自分史

私は、1972年（昭和47年）に卒業した大学の5回生です。当時、大学には大学院がなく、学生は全員寮で生活し、看護のトレーニングを受けました。朝のチャペルでの礼拝から始まる教育から、私は看護学と共に、キリスト教信仰も授かりました。常に、信仰により支えられた導かれて、よりよい看護婦をめざして働かされて来たように思っております。卒業した当時、自らの、患者との良い関係性についての説明あるいは了解ができず、立教大学大学院応用社会学専攻の修士課程に進学いたしました。対人関係の自らの課題は母子関係・関係構造と人間発達という研究に発展し、その学びの過程を通して、理論の一応の理解と、また「関係性の中で生きる」ことの重要性が分かり、1975年に一応、修士課程を修了いたしました。

以来、大学病院での臨床看護婦、短期大学での看護教師、地域民間病院での病院保健婦、保健婦専門学校専任教員、そして、パキスタンでの国際看護教育協力専門家として、いわゆる「実践」の場に身を置いてきました。パキスタンでの看護教育協力プロジェクトでは異文化の中での協力活動という初めての体験で、国情、イスラム教文化と女性の役割とその社会的地位、その中での看護、人々の生活習慣、そして国際協力のあり方や進め方など、学ぶことのみ多い活動になってしまった2年半でした。そうした貴重な体験を得たと思う反面、自己の不全感あるいは無力感を強く感じ

ていました。日本に帰国後、その不全感がなんであるかは、明確には理解出来てはいなかったのですが、米国での博士課程へのチャレンジのエネルギーにはなった様に思います。その後まもなく、1992年、米国イリノイ大学シカゴ校大学院での地域看護学修士課程でのスペシャリスト、看護学専攻の博士課程でナースリサーチャーとしての学修をする機会が与えられました。イリノイ大学ではThe Office for International Studies (OIS) のAssociate Deanで私のアドバイザーをしてくださったDr. McElmurryを始めとして、戦後間もなくから日本の看護の復興に貢献されたDr. Virginia Ohlsonなど多くの方々支援され、異文化のなかで多くのことを学ぶことが出来ました。このOISには20名以上の学生が世界各国から来ており、米国で様々な文化背景の看護の留学生たちと苦楽を共にすることができました。私にとって、シカゴでの5年間は私の人生の中でこれほどに勉強をしたことはなかったと言えるほどに苦しく、ストレスの多い時間でした。しかし、この苦しくストレスの多い学びのなかで、聖書を共に読み、祈り、支え合うことで自分の能力の限界にチャレンジできたように考えています。無事、1996年5月に博士課程を修了し、帰国しました。

II. 実践と研究

看護研究者としては、いま、第1歩を踏みだしたばかりですが、過去5年間の博士課程での学びの中で、自分の何が変わったか、自問してみると、自らの看護職者としてのアイデンティティが、より明確になったのではと考えています。現在は、短期大学で看護教員として、教育活動にたずさわり、これからも、看護実践に加わって行くことに変わりはありません。しかし、ナースリサーチャーとしての訓練を修了した今、自らの実践の過程、あるいは進め方は変わるだろうと、自らのこれからの実践に期待をしています。なぜならば、実践と研究は表裏一体の関係だからです。

「実践」の意味は周知の通り、「実際に行うこと」ですが、さらに日本語辞典（広辞苑、岩波書店）の定義

1) 筑波大学医療技術短期大学部（看護学科）

によると、「ある理解や主義によって実際に行動すること」で、さらに「人間が外界について変えようとする」ことです。この定義から、看護実践とは看護の理論や哲学によって実際に行動すること、あるいは、看護知識の裏づけをもって看護を改善しようとする活動であると言えます。ですから、その実践で看護が改善したかを常に、評価する必要があり、その評価のために研究が必要です。

「実践」の対語は「理論」あるいは「思弁」と多くの辞書には記されています。しかし、実践と理論は相補的なものであると思います。つまり、看護研究は実践の裏づけとなる看護の知識を提供するものなので、看護実践にはなくてはならないものであり、また、看護活動を看護実践ならしめるものです。

米国ではまさに実践的な研究をめざしてリサーチャーを育てています。米国の博士課程を修了したナースたちはRN, PhDの称号を使いますが、看護研究者の意味するところは「研究」する人以上の意味があります。PhD取得の多くのリーダー達は研究を方策として看護をより良い方向に導く様、指導力を発揮していました。また、大学院では看護研究者自らロールモデルとして、若い看護の研究者により妥当で信頼性の高い研究が出来る理論の開発や方法論の吟味を教授すると同時に、ネットワークや情報交換を有効にできる社交力を養わせていました。学会などに参加すると、個人研究の限界を越えて、より大きな力を結集し、専門家集団として社会の人々の健康と福祉が向上するような宣言・政府への勧告等を探採する実践活動が見られました。

看護研究の過程では研究の課題 (problem statement) とその研究の意義 (significance of study) は重要です。私の受けた米国での博士課程の研究のトレーニングにおいても、研究計画の段階で、その研究が看護実践あるいは看護学にどの様に貢献できるのか、意義あることかを明確にすることが求められ、また研究の重要な評価ポイントの一つでした。

私は公衆衛生看護学の女性保健学専攻で、博士論文では、日本の若い女性の健康増進のニーズに注目しました。日本では、未だ、系統的になされた健康増進行動の研究は少なく、情報が乏しいため、若い女性の健康増進行動をまず記述的に研究する必要があると問題提起をしました。この記述的研究は、6つの女子大学生のフォーカスグループの「健康増進行動」について、ディスカッションをもとに行動とその行動に影響をあたえている因子に焦点を当てました。その後、その情報をもとに質問紙を開発し、研究調査を行いました。

その結果の一部を要約すると下記のようなものでし

た。

1) 「健康増進行動」(元気に生活するために行っている活動)は10の領域に分けられる38の健康行動が妥当な行動と抽出できた。

2) 40%の女子大学生が自分の健康を4段階に分けた段階の下2段階の「まあまあ健康」あるいは「健康でない」と評価していた。男子学生と比較すると高い数値である。この「自覚的健康状態」は「健康増進行動」、特に、「精神衛生セルフケア」、「運動」、「環境保健」、「健康管理セルフケア」、そして「休息」の諸因子が正に、また「健康問題」が負に関連していた。

3) 「健康問題」には進路、対人関係、不規則な食事や栄養の偏り、教育、病気や怪我が、主要な健康問題と報告された。

4) 「健康増進行動」は「健康状態」、「健康増進行動のきっかけ」、「情報源の多さ」等の因子で説明された。

5) 「情報源の多さ」は「健康増進行動のきっかけ」を説明する重要な因子である。

これらのことから次の様な女子学生への健康サービス向上の提言をしました。日本の女子大学生の健康で良好な状態を高めるためには、健康問題の改善、健康増進行動の促進、そして健康教育が考慮される必要がある。大学保健活動ではユニークな健康問題を持つ女子学生の健康増進のために健康教育をすすめる必要がある。日本においても大学の正規のカリキュラムのなかで女性保健学が準備される必要性がある。また、女子大生の健康問題は学生生活に関連するため、生活を大きく規定する大学・地域の関連機関の総括的な保健システムが考えられる必要である。

III. まとめ

私の研究は保健活動及び方策を探るための基礎的情報を提供することでしたが、今後、私の研究成果の共有・検討活動を通して、個人の力を越えて、ひいてはサービスを受ける人々に健康・福祉という利益を提供できると考えます。この研究活動が同時に、看護実践でもあります。看護実践は教育・研究活動を包含し、それらの活動は不可分であり、相互に支えあって人々の利益を生む基盤であると考えます。